

講義資料1 聞いてみよう！あなたの知らない“土の世界”-放射性セシウムとの関係 -

<考えたこと>

特に印象的だったのは、少し主題からずれているかもしれないが、原子力発電所の事故は科学技術への不信感を日本中に蔓延させたことが痛手であった、という部分だ。私が東日本大震災を経験したのは小学校に入る前であり、福島で事故が起こるまで原子力発電がどう見られていたのかは過去の報道や記録を見たり人に聞いたりするだけで、実感としては分からない。しかし、少しの燃料で大量の発電ができる方法として多くの人に期待されていたことは窺うことができる。そんな中で起こった事故が科学技術への不信感をもたらしたのだと、改めてその影響の大きさを再認識し、また大学でも度々話される科学者の責任について考えた。市民がよく知らない事柄について不安を感じる時、科学的な根拠をもって説明することが求められることがあるが、たとえ科学者が正しい情報を伝えても科学自体への信頼が失われていては効果がなくなってしまう。科学的には問題がなくとも感情の面でどうしても不安が拭えないのは理解できるが、市民がそのような態度にならざるを得なかったのは不信感が少なからずあったのだろうと感じた。そして溝口先生が行った、除染活動に参加する人へ詳しい説明をした上で実際の状況をその人自身が感じられるように示すことは、科学に対する信頼を持ってもらうためにも大事なことであると感じた。

除染後も農地の利用には肥沃度の向上、除染による硬盤層の排水不良の解決など、工夫しなければいけないことが多く、農業従事者自体の数が減っている現状で再生をするためには長い時間と労力がかかるものだと知った。

講義資料2 スマート農業の死角

<考えたこと>

スマート農業という言葉が使われる時、おそらく多くの人が真っ先に想像するのは記事の最初にあるような大規模な圃場や、農業用ハウス内での農業だろう。しかし、このような農業形態が行われているのは企業あるいは法人化した農業団体がほとんどで、記事にあるように家族経営の農家では普及が進んでいないことは容易に想像できる。ICT を使った農業には初期投資がかかり、それを支払う経済的な余裕がなければ進めることは難しい。ならば、大規模でなくても、あるいは中山間地域のような管理の大変な場所にこそスマート農業が導入されることが重要であることには賛同する。中山間地域は斜面や道路からのアクセスなどの点で農地の維持には困難な場所であり、耕作放棄地となってしまう土地の割合も平地と比べて多くなりやすい。また、完全な耕作放棄地となってしまった土地を復元するには労力がかかるため、人が少なくなった地域で農地を維持し続ける方法のひとつとして、導入が有効であると考えます。